最後のプレゼント

ゆりを

このエッセイを書こうと思った理由。

あれは確か中学２年生の頃。

親友だった女の子から、奇妙で美しいプレゼントをもらったことがある。
とても強い愛と呪いのかかったプレゼント。
あんなプレゼントは、後にも先にももらうことはないだろう。

今でも時々、その時のことを思い返してみる。
いくつかのとけない疑問と、小さな痛みとともにそれはあって。
だけど疑問はとけないまま、やがて忘れる。
そして完全に忘れた頃に、また思い出す。
いつもそう。

そんなことを繰り返しているうちに、年々その思い出は小さくなり、バラバラに散っていってしまった。
あれが何だったのか、もうよくわからない。

このままだといつか完全に忘れてしまいそうな気もするので、今日は、その断片を断片のまま集めてただ眺めてみるといういつもの作業を、紙の上（というか電子書籍なのでサーバか）に残してみたいと思う。

彼女の名前は「めぐむ」。

その子の名前は「めぐむ」と言った。
「恵」と書いて「めぐむ」と読ませる。

「”めぐみ”じゃなくて、”めぐむ”なの。」

誰かに名前を間違えられると、彼女はほんの少しだけ不機嫌さをにじませて訂正した。

”めぐむ”というと、”めぐんでやる”というニュアンスが含まれているような気がして、名付けた人（おそらくめぐむのご両親）はきっと上から目線の人に違いないと、こっそり思ったものだ。

彼女は単純に「む」という音が気に入っていたようだ。

彼女は小鳥のような声で笑った。

彼女の声は小鳥のようにかわいかった。

だから怒っても迫力がなかった。

彼女は俗っぽいものを好まなかったので、そこら中のいろんなものをこき下ろしていたのだけど、その声のおかげで随分救われていたように思う。

彼女は救われたが、彼女に貶められたものはもっと救いがたいものになった。

私が彼女の声を褒めると、彼女は「そんなことないよ」と言いながら、一層かわいい声で笑った。

彼女の最初のプレゼント。

ある朝学校に行くと、私の机の上にちょこんとクッキーの包みが置いてあった。

プレーンとチョコをチェッカー柄にならべた、厚めの手作りクッキー。

青いリボンでキュッと結んだ袋には小さなカードが添えられ、こう書かれてあった。

”アンバースデープレゼント”

「アン、バースデープレゼント？」
そう聞いた私に、彼女は

「知らないの？Alice in Wonderlandに、なんでもない日を祝うアンバースデーケーキというのが出てくるの。
たぶんあなたは、ケーキよりクッキーの方が好きだと思って」
とそっけなく答えた。

彼女は「ワタナベミサトさん」が好きだった。

彼女は渡辺美里さんの歌をよく聞いていた。
当時は小室哲哉氏が曲をプロデュースしており、10代の悩みや希望を歌う曲が多かった。

「ミサトさんの曲に出てくる女の子は、みんな自分のことを”ボク”って呼ぶのよ。みんな。」

「ミサトさんは、私のわけもなく泣きたくなる気持をわかってくれるの」

彼女にCDを借りて聞くうちに、私もすっかりファンになってしまった。
渡辺美里さんの名前を呼ぶ時は、ちゃんと最後に”さん”をつけないと、怒られていたっけ。
（だから今でも守っている）

彼女に青いペンケースをプレゼントした。

彼女の誕生日に、青いペンケースをプレゼントした。

そのペンケースは当時流行っていたMICHIKO LONDONというブランドのもので、三角形の細い万華鏡みたいな形をしていた。
私も同じ形の色違いをお揃いで買った。

一個1500円と、中学2年生の身には決して安い買い物ではなかったけれど、迷いはなかった。
彼女はそのペンケースを気に入るだろうと、確信していた。
なぜなら、私がそのペンケースをものすごく気に入ったから。

彼女はプレゼントされたペンケースを見て、
「どうして？」
と言った。

「どうして、私が本当に欲しいと思っているものがわかるの？」

簡単に喜ばないのも彼女の美学のうちで、この疑問符付きの言葉が、感謝の意を含んだ最上の褒め言葉であることは知っていた。
彼女が喜んでくれて、もちろん私も嬉しかった。

だけど、この時くらいからだろうか。

私の中で、静かに彼女への嫌悪感が積もり始めたのは。

理由はわからない。

理由はわからなかった。

ある日、どうしようもなく彼女のことが嫌いになってしまった。

私と彼女は近づき過ぎてしまったんだろうか。
いつの間にか、彼女のなすこと話すことの一つ一つに、いらだちを覚えるようになっていた。

彼女を避けるようになったはっきりとした理由を、どうしても思い出せない。
ひとつ言えることは、その頃私は深刻な自己不信に陥っていたということ。

彼女とは、もう話したくないと思っていた。
もし彼女から話しかけられても、しばらくは無視していよう。
そうして彼女が悲しそうな目で、「どうしたの？」と聞いてくるのを…降参するのを、じっと待っていた。

そして私の思惑ははずれた。

私の思惑は見事にはずれた。

こちらに回答する気がないことを雰囲気で察知すると、彼女は決して話しかけなかったし、近寄っても来なかった。

一瞬にして、二人の間に大きな溝ができた。
そしてそれは残念ながら、時間が経てば埋まる性質のものではなかった。
一週間が過ぎ、一ヶ月経っても、彼女が歩み寄ってくることはなかった。

あなたはなぜ一人で立っていられるのか。

業を煮やした私が、ついに彼女に話しかけた。

「どうして、何も聞いてこないの？」

「だって、…無視してる人に話しかけても自分が虚しいだけでしょ」

確かに、それはそうだけど。

理不尽なのは私の方。
それはわかっている。

だけどあなたはなぜ、そんなにも一人で立っていられるのか。

彼女の最後のプレゼント。

その後私達が元通りになることはなかった。

同じ音楽を聞き、同じお菓子を食べ、毎日のように一緒に遊んでいた、あの時間はどこへ消えたのだろう。

それでも日々は何事もなく過ぎていくし、もしかして初めから二人の間には何もなかったのではないかと思えるようになった。
廊下ですれ違うことがあっても、綺麗に知らないフリができるようになった。

そんなある日。

我が家のポストに、一通の手紙が届けられた。

その中には、短い手紙と、銀色のペンダントが入っていた。
ペンダントには、聖母マリアの姿が彫られていた。
カトリックの信者が信仰の証に身につける、”メダイ”と呼ばれるものだ。

”神様なら、一生捨てられないでしょう？”

手紙にはそう書かれていた。

エピローグ。

その手紙をもらった後も、彼女と話す機会は二度となかった。

やがて彼女に新しい友だちができた。

私はその銀色のマリア像をしばらく大事に持っていたけど、引越しか何かの際になくしてしまった。

ジ・エンド。

それでも何度となく思い出す、あの銀色のメダイ。

マリア様は、神様じゃないんだよ？

そんなことも知らなかった私たち。

自分だけの幼稚で神聖なルールに支えられながら、必死に前を向いていたあの頃。

彼女も、思い出すことはあるのだろうか。

あとがき。

ガールズラブ（百合）のテーマで何か作品を作ろうと思っていました。
スマホでも読みやすいエッセイにしようと考えたとき、自然と題材は14歳の頃の女友達の話に決まりました。

当時私は、「授業の最後に正解を言わされる役」を先生に押し付けられ、親にも親戚にも善意の（ゆえに凶悪な）プレッシャーをかけられ、心が複雑骨折していました。

そんな中、自分独自の価値観で動く同級生の女の子がいて、それが「めぐむ」さんでした。

「自分の価値は自分で決める」
「自分の好きなものを基準にものごとを判断する」

彼女はそういう自由な人でした。

何が正しくて何が間違っているかなんて誰にも決められることじゃないから、本当はみんな自由なはず。
校舎の窓ガラスを割らなくたって、精神的にはいつだって卒業できたわけです。
中学生でそれを知っている人は、あんまりいないですよね。
知らないほうが安心できるから。
だから私は彼女に憧れ、同時に嫌悪したのかもしれません。

「誰かとひとつになりたい」「自分は自分でいたい」という思春期特有の葛藤もあったでしょうし、まあ、いろんな理由があったのではないでしょうか。

そういう、光と闇が行き交いつつ表裏一体になった精神状態を、女の子同士の友情・恋愛に絡めて描いたジャンルが、いわゆる「ガールズラブ（百合）」なのかなって、思いました。